

〔解 説〕

複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA)

上別府圭子¹⁾ 福澤利江子^{1) 2)}

複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) は、個人の人生を時間と共に描くことを目標とする質的研究の新しい方法論の1つとして、2004年にサトウタツヤ、Valsiner, J.らによって開発された。概念などの名称の推敲を経て今なお進化を続けている研究方法論である。

複線径路等至性アプローチとは、複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: TEM)、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: HSI)、発生の三層モデル (Three Layers of Genesis: TLMG) (の概念) を統合・総括する考え方である。この方法論を用いることで、「最終的には同じ到達点に達した」者の経験の特徴、すなわち、同じ到達点に至るまでの複数の径路の途上で個々人が、歴史的、文化的、社会的な側面や自身の内面から何が起こってくることを経験したかを導き出だすことができる。TEAの概念は、研究者が研究目的に応じて必要な概念のみ用いたり、他の概念と組み合わせて用いたりすることもできる。

特徴ある用語について説明する。

等至点 (Equifinality Point: EFP) とは「異なる径路を通ったとしても、同じ到達点に達する」という等至性の概念の行き着くポイントのことである。研究者は研究したいポイントをまずは等至点として定める。等至点を経験した人を招いて話を聞く手続きを歴史的構造化ご招待とよぶ。つまり、『等至点を経験した』ことを、いわゆる研究対象者のインクルージョンクライテリアとしてリクルートするのであるが、ここで研究参加者に敬意を示して『ご招

待』という表現を用いるのである。

この等至点の正反対のポイントを含めて両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP) といい、図を描くときの一方の軸が決まる。研究したいテーマは等至点に関することであるが、そのテーマと正反対の位置にいる人もいることを常に意識することで、研究者自身の関心を相対化できる。

もう一方の軸は時間軸である。TEAでは、非可逆的時間という言葉と矢印を必ず図に描くことを定めている。この非可逆的時間とは、計時可能な物理的な時間ではなく決して後戻りできない生きた時間を象徴しており、時間の流れの方向性を意味している。研究参加者が同じような経験を繰り返したとしても、またその時に同じような思いを抱いたとしても、日時も場所も環境も全く同じではないため、それぞれの時点で改めて何が起こっているのかを見ていく必要がある。研究参加者の経験を時系列に並べてみたときに、何人かは同じ経験をしている場合もあり、これを必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP) という。必須という言葉が用いられているが「通常はほとんどの人が」という程度の意味で用いている。これには制度的必須通過点、慣習的必須通過点、結果的必須通過点があり、それぞれ制度によるもの、慣習によるもの、いずれでもないが結果として通常ほとんどの人が経験したことを表している。このようにTEAでは、ある点にたどり着くには社会的な力が働いていることに着目している。ある点に向かうように働く力を社会的助勢 (Social Guidance: SG)、ある点に背くように働く力を社会的方向づけ (Social Direction: SD) という。ある点へ向かう促進因子であるSGと阻害因子であるSDがせめぎあう有様から、分岐点 (Bifurcation Point:

1) 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

2) 筑波大学医学医療系国際看護学

BFP)が見えてくる場合もある。分岐点とは複数の径路が発生・分岐する有様を示す概念であり、等至点と対概念である。この分岐点から径路が分岐していき等至点にたどり着く。この分岐点が必須通過点であり、等至点である可能性もある。これが複線径路等至性モデリングであり、個人ないし集団の経時的な経過が矢印で繋がり、その矢印を追うことで個人の変遷を可視化することができる。

複線径路等至性モデリング図を描くことができると、それぞれの点では何が起きているのか気になってくる。個人または集団の内的な変容を捉えるには発生の三層モデルを用いる。この発生の三層モデルでは第一層の個人活動レベル、第2層の記号レベル、第3層の信念・価値観レベルから、その変容の様相をレベル別に捉えることができる。信念・価値観が変容するには何かのきっかけがあり、そのきっかけには個人差があり多様である。日常生活において環境との相互作用から信念・価値観が変容するに至った事柄を、私たちは選択的に取り入れ、特に影響の大きかった事柄を記号として次のレベルに取り入れている。この外界からの事柄の取り込みを内化という。信念・価値観が変容した後、再び環境と相互作用し外界に発信し、この変容が社会的にどのようなか探りを入れる場合がある。この内から外への流れを外化という。内化と外化を繰り返し、信念・価値観の変容が確固たるものになっていく。このように各時点で何が起きているのか詳しく見ていくにはTLMGが有効であり、新たな発見を産む可能性がある。

さらに、研究を進めるうちに最初に決めた等至点に違和感を覚えることがある。研究参加者にとって意味のある等至点と、研究者の決めた等至点と異なるということであり、この研究参加者にとって意味のある等至点をセカンド等至点(Second Equifinality Point: 2nd EFP)という。このセカンド等至点を発見できればTEA的な飽和と言えらる。この発見には、同じ研究参加者に3回会ってお互いの見方を融合させていくトランスビューという方法が推奨されてい

る。セカンド等至点は、等至点と全く異なる場合もあるが、同じような意味でも研究者側からと研究参加者側からで表現が異なる場合もある。いずれにしても、先入観を持たずに研究参加者を理解することで見えてくるこの等至点の変容はむしろ歓迎すべきことであると言われている。

TEAでは分析方法に関しては、具体的に定型化されていない。研究参加者の人数に関しては「1/4/9/16」の法則と言われ、それぞれの人数によって見えてくること異なる。臨床の実践の場でも使用されているため、1人の患者に対して行う場合もある。1±0は個人の径路の深みがわかる、4±1は多様性の萌芽を可視化できる、9±2は径路の類型化ができる、16±3は時期推移の骨格が見えると言われている。分析としては、人数が増えてくればKJ法を併用するなど、研究者によって分析の方法はさまざまである。分析方法が定められていないために分析にあたって戸惑うことがあるが、時系列に並べることが最大の特徴である。まずはデータの逐語録を作成し内容や筋立てが理解できるように精読する。次に文字データを意味のまとまりごとに区切っていく。区切り方としては、①話し手の主題はある程度無視して事象ごとに切り出していくか、②ボトムアップに話し手の語ろうとしている主題ごとに切っていくか、③研究テーマに鑑みて対応した区切りを抜き出すという方法もある。次にそれぞれの人の経験を時間順に並べ、類似の経験を同じ列にそろえてラベルを考える。まずは①のつもりで切りだし、次の段階で②を考えながら並べる方法が推奨されている。また、③を用いて全体を整理する1つの方法として、この段階で必須通過点を決めたり、分岐点を見つけていったりする方法もある。

TEAの醍醐味は、TEAを使って整理してみると、思いもよらない発見があることである。この方法論でなければ発見できない可能性も大きい。すでに質的研究の1つとして紹介され、主に保育学・教育学・スポーツ心理学などの分野で論文が公刊され、今後ますますの活用が期待される方法論である。看

護の営みは、人々の病いや暮らしに寄り添い、人々が喪失の悲しみや苦悩や怒りとつきあいながらも、誇りを持ち続けて安寧に生きられるようにケアすることである。ふだん私たちの研究は、疾患や症状ごとのまとまりや、看護支援ごとのまとまりで行われているが、たとえば、「〇〇の告知を受けた」ことや「セカンドオピニオンを求めて別の医師を受診した」点では共通しているとしても（等至点）、その間に患者や家族が通る道（経験）はさまざまである（複線径路）。さまざまであると同時に、何か共通した経験も浮かび上がってくるかも知れない（セカンド等至点、等至点の変容）。この複雑で矛盾に満ち、また変わりゆく人々の経験の理解抜きには、よい看護はなし得ない。時間軸をもって人々の経験の理解

に迫るこの方法論が、実際の看護の現場に活かせる研究を産み出す可能性は大きい。使用感を開発者らにフィードバックしながら、看護学研究者が方法論の進化の一翼を担ってもよいのではないだろうか。

参考文献

- 荒川 歩, 安田裕子, サトウタツヤ: 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例, 立命館人間科学研究, 25: 95-107, 2012
- 複線径路・等至性アプローチ: <https://sites.google.com/site/kokorotem/paper>
- 安田裕子, 滑田明暢, 福田茉莉他: TEA理論編 複線径路等至性アプローチを活用する, 4-28, 新曜社, 東京, 2015
- 安田裕子, 滑田明暢, 福田茉莉他: TEA実践編 複線径路等至性アプローチを活用する, 4-40, 新曜社, 東京, 2015
- 安田裕子, サトウタツヤ: TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する, 1-25, 誠信書房, 東京, 2017